

# 常磐三寂年譜考

附・藤原隆信略年譜

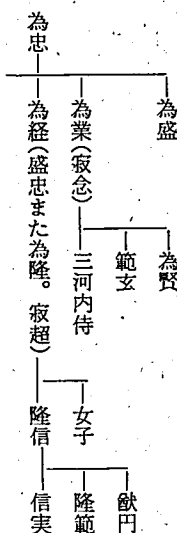
井上宗雄

- 1 本稿は、常磐三寂<sup>大原</sup>の年譜を主とし、その近親者である為忠・三河内侍・隆信らの事蹟をも併せ加えた。
- 2 ○印は三寂一族に直接関係ある事項、△印は歌壇及び一般重要事項である。
- 3 人名下に所々アラビア数字で年齢を記した。
- 4 頻出する書名の略符号は左の如くである。

- 中||中右記 台||台記 兵||兵範記 山槐||山槐記 世||本朝世紀 吉||吉記 玉||玉奏 明||<sup>明月記</sup>明記及 今||今鏡 山家||山家集 寂然||寂然法師集 隆信||藤原隆信朝臣集 夫||夫木抄群||群書類従 続群||続群書類従 中世歌合||<sup>中世歌合</sup>中世歌合集

谷山茂・樋口芳  
群書類編

- 5 為忠家の略系図を左に掲げる。



類業(寂然)  
兼碁ほか二倍  
女子二人又は二人

天永—永久年間 ○天永頃までに為盛<sup>別名</sup>生れるか。次いで天永末—永久初に為業生れ、永久初の頃、為経<sup>初名</sup>生れるか。みな同母兄弟、父は為忠<sup>六位藏人、左兵衛尉また右白河院御に侍す</sup>。母は橘大夫<sup>待賢門院女御</sup>。○永久四年六月、筑前権守為忠、六条宰相家歌合(群)に出席、また頭輔家歌合等にも(夫)。

元永年間 ○元年、為忠この頃五位安芸守、皇后宮<sup>子</sup>少進。六月頭季邸人曆影供(群)に出席。○二月、為忠子兼碁生れる。頼業もこの前後に生まれるか。△為忠、他に二男一女。

保安年間 ○二年、為忠、長実家兩度の歌合<sup>(和歌歌合二十卷本)</sup>に出席、又、皇后の堀河殿を造営して安芸守重任。

天治元年 ○六月二十二日、為盛、通仁親王家藏人となる(永昌記)。○十一月、中宮璋子女院号宣下<sup>待賢門院</sup>。為忠室はその女房で、また白河院側にも侍し、常に夫を上階せしめるべく口添え

し、為忠は五節を奉つて昇殿を許された(中<sup>二</sup>見<sup>一</sup>)。

大治二年 ○金葉集成る。為忠、再奏本で二首、精撰本で一首都を撰入される。

大治四年 ○七月七日 白河院77没す。「女房なつとも<sup>為忠</sup>」院側に待す(長秋記)。為盛、重服不出仕の人数に入る(中)。

○八月十六日 待賢門院別当を補す。為業院北面に参す(長秋記)。

○十月九日 除目「少内記藤原為業<sup>文章</sup>」と中右記にみえる。(3)

大治五年 ○三月九日 待賢門院藏人一廊為盛、内藏人となる(中)。七月廿五日内物忌、十一月十五・六日の殿上瀧醉・新嘗祭に参仕(時信記)。

天承元年 ○為盛、正月五日叙位の儀に参仕、三日十九日稻荷祇園社行幸に舞人を勤める(長秋記)。

○八月以前 盛忠<sup>為六</sup>位藏人となり、八月二日以降の時信記にその名が頻出する。

九月八日 宮中歌会<sup>十五首題被請</sup>に盛忠<sup>為六</sup>参仕(時信記)。廿六日歌会にも盛忠詠歌か(時信記による上題は月照竹・同題の詠。なお九月六・八・九日及び十月十九日にも宮中歌会(時信記)。崇徳天皇の歌会頻り。○十二月十三日、三河守為忠、丹後守に遷る。盛忠、少尉となる(時信記)。

為忠、三河守在任中<sup>天治二年</sup>正月一か「為忠朝臣三河国名所歌合」を行。作者は為忠・為業・為経・道経・忠隆・珠賢・意尊・清輔ら。題は伊良古賀崎・志賀須加渡以下(夫<sup>七・八・九・十・十一・十二・十三</sup>等)。

長承元年 ○正月二十二日 除目「伊豆守藤原為業<sup>為業</sup>」次いで五月七日「藏人為盛」「少内記為業参入、依為文章生、昨日仰宣命趣也」(中)とみえる(また五月九日及び翌年八月廿五日にも)。なお為忠はこの頃、

崇徳中宮聖子の戦事であった(中<sup>二</sup>見<sup>一</sup>)。○この年 頭広<sup>成俊</sup>と為忠女との間に覚弁生れるか。又その同母姉妹もこの頃の生れか。(4)

長承三年 ○正月五日 叙位「従五位下藤盛忠」(中)。

○六月頃 常磐<sup>為忠</sup>五番歌合<sup>(五)</sup>。作者は為忠・盛忠・道経・頭広・仲正ら。題は野径草深・螢照細流以下(夫<sup>七・八・九・十・十一・十二・十三</sup>等)。

○九月 頭輔家歌合(群)に為忠出席。○十二月十二日 為忠、三条烏丸殿を造営し、正四位下、次いで木工権頭となる(中・今)。

○長承年間か 「丹後守為忠朝臣家百首」(群)成る。作者は為忠・為成・頭広・仲正・為業・為盛・盛忠・頼政。為盛は「散位藤原為盛左近大夫改名兼綱」とみえるが、尊卑分脈の記載を考え合せると従五位下左近將監くらいであったのか。この頃、廿五才前後。二弟は「伊豆守藤原為業」「筑前権守藤原盛忠改名為経」とある。両者廿一廿五才の間か。○為忠丹後在任中の、為業の挿話が今鏡<sup>有補</sup>にみえる。

保延元年 ○四月廿一日の中右記・五月十七日の長秋記に為盛の名がみえ、以後、殆どみえず。(6) ○六月廿五・六日、八月十日の中右記に少内記為業の名がみえる。この年成家歌合に為忠出詠(夫<sup>七・八・九・十・十一・十二・十三</sup>等)。

保延二年 ○長承二・三年—保延一・二年の間<sup>恐らく長承三—</sup>「木工権頭為忠朝臣家百首」(群)成る(7) 作者は為忠・親隆・頭広・仲正・為業・為盛・為経・頼政。「伊豆守為業」「散位為盛」「備後守為経」(名初見と改)とみえる。

○正月 藤原俊盛任備後守、為経、

備後守を辞すか。三月廿三日「少内記為業」(字機抄)。○この年

為忠没す。五月十日、備後守俊盛、丹後守に遷る。為忠の死はこの前後か。父の没後、頼業哀傷歌をよむ(風雅集三〇)。また為業

も常磐に籠り、悲しみの歌を詠み、源仲正に贈る(風雅集六九)。但しこの歌は宝物集によると盃山に籠って詠むとある。

保延三年 ○九月二十八日 後拾遺往生伝に寂没すたとあるが、為業入道寂念ではなく、別人か。

保延四年 ○正月二十二日 為経任長門守(世)。

保延六年 △十月十五日 佐藤義清出家(円位ま。た西行)。

永治元年 ○十二月七日 崇徳天皇、近衛天皇に譲位。頼業は近衛天皇東宮の時の蔵人・左近将監二卿であった。(関戸家本唯心坊照參)

康治元年 ○正月五日 頼業叙従五位下(世)。△正月十六日 藤原基俊83没。○正月二十三日 源師行任長門守(世)。為経、長門守をやめるか。(8) △二月二十六日 待賢門院出家、門院中納言、頭広・円位らに廿八品歌を詠ます(長秋抄。9)。○この

年 為経は親忠女美福門院加賀との間に隆信をもうける。

康治二年 ○正月三日 皇后宮少進為経叙正五位下(世)。皇后は後の美福門院子、永治元年十二月立后。為経の岳父親忠の妻は門院乳母伯耆であつたので(字機抄)、その縁によって、恐らく立

后の時に為経は少進に任じたのであろう。兄為業の位を超える。

○正月二十七日 除目「彦岐守従五位下藤原頼業人」(世)。直ちに辞退か。(10) ○五月十日 為経出家、叡山に登る(台・世)。

「頗好文学者也」(台)とあり、学才があつたらしい。後、日(或は曰か)想坊と号し、長門入道と称せられた。法名寂超。出家に當って詠歌(「在明の……」後業)。その後、都にて詠歌(六歌合)。○十二月三十日 「被下伊賀守藤為業辞書」(世) 云々とみえる。やがて守を辞すか。

久安四年 ○この年 頭広35、親忠女為経妻 隆信母との間に女子後の八条院三条を生む。(11) 即ち為経室は康治二年以後、この年までの間に恋愛関係があつて(長秋抄)頭広妻となる。隆信、頭広に養育される(世)。

久安五年 ○三月十八日 「小式親忠兼筑前守」(世)とある。親忠は二年三月には摂津守とみえるが(世)、四年十一月には重家が摂津守となつてゐるので、この頃、小式に転じたのであろう。小式兼筑前守といへば屈指の受領である。すべて美福門院の眷顧に依るか。なお親忠女頭広妻 隆信母も引続き門院に仕えたい。

△六月二十八日 右衛門督成家歌合(群)。○十月十日 隆信、美福門院蔵人となる。「今日被補女院蔵人等、蔵人二人中藤原隆信」(此間一本有為経之字)入道親忠孫八才」(台記別記・兵)。なお頭広36も女院殿上人となる。頭広も隆信も美福門院の愛顧があつたらしい。

○この年 光房男母為忠女定長生れる。

久安六年 ○十二月三十日 「従五位下藤原隆信蔵人 故獻子内親王末孫(世)。○この年 頭広女母親忠女 後の高松院新大納言生れる。

仁平元年 △この年か詞花集成る。頭広一首入集。為忠と諸子入集せず。(12)

仁平二年 ○三月十六日 「中宮権大進為業」とあり(兵・山

槐、十一月五・十五日にもみえる。<sup>四三</sup> ○十二月三十日 隆信11任越前守(兵)。これ以前、上野守<sup>正しくは介か</sup>になり、下向した由、

隆信集<sup>四四</sup>にみえる(「とし未だいはけなかりしに上野」<sup>の守にて下るとして……詠歌初見</sup>)。

仁平三年 ○四月六日 祖父若狭守親忠、病により守を辭し、

隆信12若狭守となる。(世・兵)。なおこの春、隆信任地越前に

下るか。思いの外なる佳人を見出して贈答歌あり、また別なる女とも歌を贈答した(隆信<sup>四四</sup>)。

久寿元年 十一月十日 権大進為業、春日祭中宮使(兵)。○

この年 顯広女<sup>母親忠女。後の八条院</sup>生れる。

久寿二年 ○四月二十一日 賀茂祭に権大進為業(兵)。△五

月六日 六条顯輔67没す(享年等は兵範記による)。

○新院歌あつめさせおはしますとききて、常磐に為忠が歌の侍りけるをかきあつめてまゐらせけるを大原よりみせにつかはすとして

寂超長門入道

もろともにちることのはをかくほどに

やがてもそでのそほちぬるかな

西行の返歌としふれがあり、続いて

寂超ためただが歌に我が歌かきくし、又弟の寂然が歌などとりくして新院へまゐらせけるを、人にとりつたへてまゐらせさせけりとききて、兄に侍りける想空がもとより

いへの風つたふばかりはなけれども

などかちらさぬなげのことは

また西行の返歌いへのかせがみえる(山家)。

右が何時の事であるかについては諸説あるが、一応仁平—久寿

頃の事と推定する。<sup>四四</sup> ○右に依り寂超が出家後しばしば常磐に赴き、また大原に住した事、及び久寿以前に西行と交わりのあつた事が知られる。なお寂超は大原で摩訶止観の講義を行った。(山家)。○七月二十三日 近衛帝没す。寂然詠歌<sup>(唯心坊集)</sup>。また、近衛院かくれさせ給ひにける頃、藏人に侍りける時なれつかりまつりける事を思ひ出でて彼院に侍りける土佐内侍がもとに申入れける

寂然法師

いかばかり心のやみにまよふらむ

月かくれにし雲の上人

(後葉集)

右によれば寂然は已に出家<sup>(天養一久の間の間か)</sup>、唯心坊寂然<sup>(聞書殘集によるじやせんとよむか)</sup>と称していたらしい。出家の翌春詠歌<sup>(今撰・治承三〇六五)</sup>、出家後、横川に住み、また大原で寂超と共に緑忍上人から止観を習った<sup>(唯心坊集)</sup>。○十月二十三日 忠通、亡室宗子の仏事を修す。

為業、非時を調進す(兵)。○この年 成家父顯広<sup>母親忠女</sup>生れる。

保元元年 ○久寿二年七月—保元元年正月までの間、寂超、後

葉集を撰ぶか。為業、為経・寂然各一首、為忠六・為忠母一首撰入。

○二月五日 為業、左衛門督基実拜賀の前駈を勧める(山槐・兵)。

○三月十五日 花山院忠雅・北の方女<sup>女家</sup>、東宮<sup>後二</sup>に参る。その

時、東宮に侍した「女房川」(山槐)とあるのは為業女<sup>後の二条院三河内侍</sup>か。

○七月 保元の乱。崇徳院讃岐に流される。この後、長寛

二年まで八年の間に寂然は讃岐に赴き歌を院に奉る(寂然・風雅集九四〇)。

また西行と贈答歌「讃岐におはしまして後、歌という事の世にいと聞えざりければ寂然がもとへいひつかはしける

歌<sup>略</sup> (山家) とある (古今著聞集には寂念とある)。歌壇的な催しは永

曆・応保から次第に復活するので、この贈答は保元年間か。○

八月二十九日 基実らの前駆に為業 (兵)。○九月十七日 隆

信15守のまま右馬権頭に任ず (兵)。典型的なる近臣受領子弟の

官途。○十月二十七日 中宮皇子、皇后となる。為業、皇后宮

権大進となる。

保元二年 ○二月十二日 皇后宮権大進為業、春日祭使基実

に扈從。なお為業は皇嘉門院殿上人でもあった。また八月九日の基

実任大臣兼宣旨参内及び十九日の任大臣参内の前駆を勤める (兵)

○春 諒闇の鳥羽殿花盛りに隆信詠歌 (隆信)。○十月二十二

日 隆信叙従五位上、造大内裏勅賞、玄輝門造功 (兵)。○この

年 顯広女 <sup>母親忠女、後の生れる。</sup> <sup>建春門院中納言</sup>

保元三年 ○正月 六日為業従五位上、三十日除目「対馬守藤

原為業人<sup>藤</sup>」 (兵) とみえる。○二月三日 皇后皇子、皇太后と

なる。為業が皇太后宮大進であつたという尊卑分脈の記載を信ず

るならば、この時皇太后宮 (権大進に任じたのであろうが、その

名は記録に現れない。なお昇殿を望んだ事もあつた (承三十三)。八

年後の仁安元年には寂念と見え、保元三—仁安元年の間に出家か

(長寛二年忠通仁安元年為業の死)。出家前に為業は常磐邸に堂供養を

行う。隠者らの集まるを聞き、西行、為業に歌を贈る (君が<sup>古</sup>に返し

る。色かへで独り残れ)。○寂然 (超とも) の住む大原に為業赴き、月を見

つつ外に泊つたのに対して寂然が歌を贈つたのも <sup>治承三十六年歌合、</sup> <sup>新千載集一八八四</sup>

為業在俗の時か。また為業が常磐に居ると、寂然が赴き、西行、

寂昭<sup>超</sup>・静空<sup>日野宗</sup>らが集まって歌や連歌を詠んだのも <sup>開書</sup> <sup>殘集</sup> 為業

在俗の時か (なお「西公談」)。○為業は出家後、東山の靈山に籠つ

たが (宝物集)、その後、大原に住んだか否かは不明。多く常磐

に居たのではなからうか。寂超・寂然は主として大原に閑居して

いたらしい。○隆信は為業の入道を遅く聞き、出家を知らせて

くれなかつた事を恨みつつ歌を贈る (隆信)。○三月二十二日

石清水臨時祭。隆信舞人 (兵)。(以後右馬権頭として)。△八月十日

後白河天皇、二条天皇に讓位。○この年 顯広女 <sup>母親忠女、後の生</sup> <sup>前高院女納言</sup>

れる。○二条天皇東宮の時 <sup>久寿二年</sup> 隆信同じ齡の女に忍び渡る

(隆信)。

平治元年 ○二月十三日 皇后統子、女院号宣下 (上西)。某年、

門院女房法勝寺に赴く時、寂然、親しき女房に歌を贈る (寂然)。

△十二月 平治の乱。

永暦元年 七月二十二日 「近日殿上番有其沙汰不仕人五人、

依院宜除籍」 (山槐) とあり、周防守隆輔、若狭守隆信19の名がみ

える。この後、隆信昇殿を久しく許されず、やや不遇の如し (隆

信<sup>賀・祥</sup>。△七月 清輔家歌合 (群)。判者通能は寂超の女婿隆信

弟 (分脈)。俊恵・顯昭・師光・敦頼・公重・祐盛ら、六条家・歌

林苑に親しい実力者達が集つた。○十一月 隆信、五節を奉る

(山槐)。○十一月二十八日 美福門院没す。十二月二日高野

納骨に隆信供す。四十九日詠歌 (隆信)。父寂超は女院后位の時

の少進、為業男為賢も女院判官代 (分脈)。この後親忠女<sup>門院女房は</sup>

八条院 <sup>美福門に近仕 (御子左、系図等)</sup> 隆信も「御名残の君たち」即ち八条

院に仕えた(隆信)。

応保元年 ○正月二十三日 六条重家遷任若狭守。隆信若狭

守をやめるか。○殿上除かれし翌春の臨時祭に隆信舞人とな

り、花を見て詠歌、女房内侍と贈答(隆信・新勅一〇四)するはこの

年か(但しこの「忘るなよ」の歌は月輪集七)。○七月八日 平野大原野

行幸日時定、隆信舞人の人数に入る(山槐)。○この年 隆信20

の長子欽元生れる(貞永元年七十二)。

応保二年 ○この年 定家父顯忠女生れる。隆信21の異父弟。

長寛元年 ○三月十五日 隆信、石清水臨時祭の舞人を勤め

る(石清水文書所収)。

長寛二年 △二月忠通68没し、八月崇徳院46没す。○長寛・

永万の頃から隆信ようやく諸方の歌合・歌会に出席し始める。白

河歌合・小野宮侍従歌合・播磨守隆親歌合・歌林苑会・若狭三位

経盛歌合等。如

永万元年 △六月二十五日 二条天皇、六条天皇に譲位。○

二条天皇在位中 平治元年以後 隆信、梅壺の辺に立つ女と契り歌を贈答す

(隆信四)。三河内侍、南殿の花盛り帝の命に依り歌よむ(玄玉

新古今集)また七夕の日にも(統詞花)。なお三河内侍と二条院讃岐

の贈答歌が讃岐集にみえる。○七月二十八日 二条上皇23没

す。この後、某代作師光・三河内侍と歌を贈答す(山家集)。

○この頃 統詞花集 成るか。為業(以下集に入

然三、隆信一、三河内侍一首入集す(参考入集歌数 顯忠八、俊忠四、

昭三、西)。○この頃 今撰集 成るか。為業・寂超各二、寂然

五、隆信・三河内侍各二首入集(参考入選歌数 顯忠十、顯忠九、

兄弟中では寂然の歌が最も高く評價されていたか。

仁安元年 ○この年春か、三河内侍、南殿の桜を見て詠歌(風雅

五)、夏、時鳥を聞きて詠歌(玉葉集 三三五)、また隆信に歌を贈る(万葉

八)。いづれも二条院をしのぶ歌。○夏一秋 重家歌合(群)。

顯忠判。経盛・小侍従・頼政・顯昭・俊忠らの名流会す。三河内

三負二持、寂念(入道一勝二負二持、隆信一勝一負三持。○為業

入道の事、右に初見。この後、伊賀入道、又は伊賀大進等と称せ

られ、しばしば歌会を催した。入道為業会(海辺 頼政集)・為業

入道歌合(雨申 林葉集)・為業入道家歌合(和歌合 略目録)等。忠度

の有名な「ささなみや」の歌も右の会で詠まれた。○十月二十

一日 頼政、兵庫頭をやめ、正五位下となる。隆信悦びの歌を贈

る(隆信集)。

仁安二年 ○この年暮春より惟方入道 隆信隠遁裡に自詠をまとめ始

める。叡山・横川・大原等に住む。この年以後しばしば寂然と歌

を贈答す。また寂超とはかつて美福門院后位の時、共に仕えたの

で 惟方入道 親交あり、歌を贈答す(栗田集)。

○六月十六日 後

白河法皇法住寺殿不動供養、隆信供奉す(愚昧記)。

○十月十

八日 中納言顯長没す。生前徳大寺実定と贈答歌あり、その贈答

をした頃、実定・隆信・俊忠・敦頼ら会して詠歌(林下集)。

○十

從清輔ら(兵)。○十二月二十四日 顯広54俊成と改名す。改

名以前に大宮邸に西行・寂然・西住など赴き、和歌・連歌を詠む

(聞書集)。△この年 清盛太政大臣(五月)。

仁安三年 ○二月十九日 六条天皇 高倉天皇に譲位。○三月

俊成・建春門院姉の京極局に伴われて建春門院に祇候(日記始)。

日記に、門院に仕える女房の一覧表があり、その中に「丹後範玄

僧正が妹」とあり、範玄の妹がここに参仕していた。○九月

十八日 大嘗会御親の供奉を定める。隆信も加わる(兵)。○年

時は分明でないが寂然の主な事蹟を列挙しておく。寂然しばしば

西行と歌を贈答し、西行の同行西住が没し、高野に納骨した時な

ど歌を贈り、西行と共に大原に住む尾張尼上(傳不)を訪れ、隠棲の妹

を訪うてその死をみとり、また高野に赴いて宮の法印(崇徳皇子・元性) 庵

室で歌をよみ、澄憲(都僧)の説経を聞いたりして(山家・寂然・元性) 中央歌

壇とは関係ない隠遁生活であった。○

嘉応元年 ○三月十四日 石清水臨時祭。舞人隆信。調楽及び

試楽にも参ず(兵・宮寺縁事抄)。次いで四月廿六日の石清水行

事、八月廿九日の賀茂行幸、十一月廿一日の御親にも参仕(兵)。

嘉応二年 ○五月二十九日 実国家歌合(群)。清輔判、講師

頼政、読師隆信。隆信四勝二負。○秋・冬の頃から今鏡成る。寂

超の作か。○十月九日 住吉社歌合(群)。俊成判。女御家兵

衛佐(元二条院) 寂念・隆信(從五位行) 寂超みな一勝一持一負。○

十月十六日 建春門院北面歌合(群)。判者俊成。隆信一勝二負。

承安二年 ○十二月八日 広田社歌合 本は十月十七日とす。俊

成判。三河内侍一勝二負、右馬権頭隆信(書院部本による。類從

持、寂念法師(書院部本による。一勝一負一持。○この年か歌仙落

書成る。隆信七首、寂超三首、寂然五首を掲げ、歌風を批評。隆信

の作中の一首(上)は実定家歌合で詠まれたもの。○承安二

年頃、少輔・定長(寂)出家か。出家前の某年春、隆信と歌を贈答、出

家後また贈答歌あり(隆信)。また為業とも贈答す。○

承安三年 ○正月五日 葉室光頼50没す。五十日に寂然、入道

惟方(光頼)と歌を贈答す(別当口)。年代明らかなる寂然の記録こ

れが最後か。寂然の作「唯心坊集」・「寂然法師集」・「異本寂然集」

「法門百首」以上現存。撰集「百法門」(八雲御抄)。なお北白川

にて寂然・西行・隆信、歌と連歌を詠み、上西門院兵衛も来あう

事、隆信大原の寂然を訪うて帰洛の後に歌を贈る事が隆信集(推一

にみえ、兄想空が大原に没した後、寂然が西行と歌を贈答した事

が山家・寂然集にみえる。元永頃の生れとしてこの年五十五、六

か。○隆信、承安初年に正五位下となるか。○寂然及び清輔

より悦びの歌を贈られる(隆信)。○三月十四日 石清水臨時

祭。舞人隆信(宮寺縁事抄)。○九月九日 弁経房、院使として兼実

25を訪い、来月の建春門院新御願寺最勝光院供養の事を打合す。

障子絵には平野行啓・日吉御幸の図を描くが「各供奉大臣以下、

併被写図其面貌、馬権頭隆信依墟其道図之」(玉)とみえる。十

二月七日兼実それを見て「皆悉被写其面相、可謂奇特事也」とあ

る。隆信の似絵の妙手は己に著明であつたらしい。

承安四年 ○八月二十日 鳥羽殿御念仏始「御念仏間番廿五日

……隆信朝臣」(吉傍点私付)。

○八月十四日 実定、亡室周忌を行行。人々参集「院殿上人・前右馬権頭隆信朝臣。」(吉傍点私付)。

○右によると隆信は承安三年九月—四年八月の間、右馬権頭を辞し、従四位下となつたらしい。昇階の時、重家・頼政・清輔、悦びの歌を贈る(隆信・重家)。

この後、臨時祭加陪従となり、小侍従に歌を贈る(小侍従とは親しい間柄で、あつた隆信・小侍従集)。

○九月一日より後白河院今様合。「九番左濟綱朝臣改隆信 右師広勝」(吉)。

安元元年 ○閏九月十七日 兼実家月十首歌合。隆信参す(隆信・兼実・夫木抄等)。

○十月十日 兼実家歌合(群)。清輔判。寂念法師一勝二負、隆信朝臣一勝一負一持。○仁安—安元

この間に隆信が出席したと思われる歌合は公通十首会・歌林苑歌合・俊成家十首・皇居宮・頼輔家歌合・法住寺殿供花会二度・教長入道歌合・通親家歌合等。また前述の為業歌合もこの頃と思われる。四

治承元年 △六月 清輔没す。○この年 隆信36中務長重女との間に信実隆をもうける。同母兄隆範この前に生れる。

治承二年 ○二月 二・十二日兼実邸歌合、隆信参す(玉)。

○二月二十六日 隆信37兼実を訪う。兼実過日俊成を娶めたのを隆信が俊成65に語り、俊成、兼実邸訪問を期す。翌日隆信、兼実を訪い、三月六日八条院熊野詣の供をして帰洛の後、兼実邸に俊成を伴う事を申入れる(玉)。

○三月十五日 別雷社歌合(群)。

俊成判。前律師範玄寂念子及び隆信三持、寂念二勝一負。定家17・頼政74・俊恵・寂蓮・顯昭加わる。

○三月—六月 兼実家百首。隆信作者となる。隆信・寂蓮は早くから歌の名手として並称

され、俊恵十座の百首、俊成十首等で何れ劣らず評されたが、この百首の時、隆信は未だ官人で公事に仕出、寂蓮は閑居していたので、寂蓮の歌の方が優れていると批評された(無名)。

九月二十日披露(玉・隆信・林)。

△六月二十三日 俊成初めて兼実を訪う(玉)。

○九月頃 公重没す。家集「風情集」承安三年—治承二年頃成る。隆信家会に公重加わる。四なお隆信家会の事、林葉集・頼政集にもみえる。

○十一月十四日 言仁親王御三夜産養、上院隆信手長を勤め、十六日、五夜の儀にも参仕(玉)。

○この年 平康頼赦免上洛、この後、宝物集成る。三叔兄弟の事が記されている。○この頃 隆信、建礼門院右京大夫と恋愛関係があつた(隆信「上人よりも色好むと聞く人」(建礼門院)。

治承三年 ○正月十九日 藤原範能任左兵衛佐、隆信、範能の父修範に悦びの歌を贈る(隆信)。

○七月二十九日 平重盛没す。伝隆信筆重盛肖像(神護寺藏)。

○八月二十六日 隆信、兼実邸に赴く。密々歌合。また九月七日にも(玉)。

十月十八日兼実家歌合(群)、俊成判。隆信一負二持。

治承四年 ○四月五日 寂超、西山草堂において花藏院法印元性崇徳皇子の古今集崇徳院本を写し、十八日集を見合せて仮名を付す(源承和歌口伝)。

寂超の年代明らかなる事蹟の最後。寂超、嘉応二年以後の記録類に所見なく、全く隱遁生活を送っていたか。隆信集二に「山入道久しく訪れぬおほづかなきなどうらみつかはして」と詞書して贈答歌がみえるが「山入道」即ち寂超か。永久初の生れとしてこの年六十六、七才であろう。

○四月二十二日 即位の儀に隆信大將代(吉・安德天)。



祭の陪從(山機)。○六月—十一月 福原遷都。この春か、隆信、

上西門院兵衛と歌を贈答す(隆信雅)。○七月三十日・および

八月十八日 兼実、隆信をして俊成の瘧を見舞わす(玉)。△こ

の年 明月記始まる。頼政戦死す。○十二月以後—寿永二年四

月 一品経和歌懷紙成る。沙弥寂念、法師品二首を詠ず。寂

念の記録にみえる最後。七十才前後か。○治承二年—寿永二年

頃 治承三十六人歌合(中世歌合)成るか。作者に三寂・隆信加わる。

○この前後の年の秋 隆信、妻(長重女、隆範)を失う。兼実・成

範らより悲しみの歌を贈られ、山の入道(寂超) 観音寺に弔来たり、

隆信と歌を贈答、翌年か定家も隆信に悲しみの歌を贈る(隆信)。

養和元年 ○三月二十八日 隆信40叙従四位上(八条院治承四年未給) 頼

輔・顯昭より悦びの歌あり。この前後か昇殿、実定(大納言)より悦

びの歌を贈られる(隆信)。○八月八日 隆信、兼実を訪う(八条院の使者・玉)。

○十一月二十八日 隆信任右京権大夫(吉)。

寿永元年 ○七月二十三日 隆信、近衛舍人の子細詳しきに依

って兼実から番長となるべき人物詮衡の相談を受ける(玉)。○

十一月 月詠集成る。為業七、寂然九(八)、隆信十一、三河内侍

六、為忠一、範玄三、(寂超一) 首入集(参考・後成二十九年、俊惠二十五

定家。○隆信、八条院に侍する事(玉十二月二日)。

寿永二年 ○二月 藤原光能没。伝隆信筆光能肖像(神護寺藏)。△

六月 平家都落。隆信、経盛家・資盛家歌合に出席した事が隆信

集にみえる。○八月二十日 京都に後鳥羽天皇4立つ。今鏡

嘉成二の後、後鳥羽帝踐祚までの事を、隆信「いや世継」を著し

て記したという(増説序)。

寿永三年(元暦元年) ○四月一日 隆信43、兼実36を訪う

「和歌及密事談(密事者女事也)」(玉)。○四月十日 頼朝、源光行らを

鎌倉に招く。隆信、歌を光行に贈るはこの時か(隆信)。

文治二年 ○十月二十二日 隆信、歌合(桂宮本)に出席。○こ

の年 西行伊勢百首に隆信加わる(隆信)。

文治三年 ○一月九日 隆信46院宣により聴昇殿。兼実この措置

を難す「此事非拙也、然而為院近臣不能申是非、加之祖父為忠、雲客、

又隆信二条院並先帝為二朝之侍臣、仍有此恩、猶不為可」(玉)。

隆信が後白河院・八条院に近仕した恩典である。実定(左大臣)悦び

の歌を贈る(隆信)。○二月五日 良通家作文詩歌に隆信参す(玉)。

○春 殿富門院大輔百首、隆信・定家・家隆ら(各家)。

文治四年 ○二月十八日 隆信、院の侍臣たる事(玉)。○四

月 俊成、千載集を奏覧す(明)。隆信七、寂然六、範玄四、寂

超・三河内侍各三、為忠・為業各一首入集(実は二二九寂然の歌は、為業の作か、(参考)照)。

○五月十六日 祝部成仲九十賀(百餘)隆信、悦びの歌を贈る(隆

信・玉葉集四〇)。

文治五年 ○一月二十二日 兼実(為忠)71没す(仁和寺藏)。

建久元年 ○正月十一日 任子(兼実女)女御として入内、(文治六年)女

御入内御屏風和歌(群)に隆信作者となる。△この年 西行

没す。冬、頼朝入京す。

建久二年 ○正月七日 経房叙正二位。隆信悦びの歌を贈る

(隆信)。○三月三日 若宮社歌合(群)。顯昭判。正四位下右

京権大夫隆信とみえる（叙正四位下。の年月不明）。○閏十二月十六日 実定53

没す。隆信と親交があった（隆信・林下集）。○この頃 玄玉

集成。隆信十九、寂然十、寂念五、寂超三首入集（撰者は三寂の可  
い。三）。○

建久三年 ○三月十三日 後白河院66没す。隆信、院の肖像を

描く（神護寺略  
記四参照）。院は法然の説法を聞いて随喜し、隆信に法然の影

を写さしめ、蓮華王院宝蔵に収めたという（黒谷源空上人伝、拾  
遺古徳伝録同など）。

建久四年 ○二月十三日 隆信52・定家32らの母没局五条す。哀

傷歌（隆信・拾遺愚草等。なおこれ以前に祖母歿）。○秋 六百番歌合（隆

信（二十四勝四十  
七））

建久六年 ○正月二十日 経房家歌合（群）。俊成判。隆信二

勝二負一持、三河内侍一勝三負一持。△春・夏 頼朝入京。

○十一月二十八日 賀茂臨時祭に隆信参仕（三長記）。（隆信久しく臨  
時祭の舞人、  
侍従つとめ、懷旧の歌を重保に贈る。隆信・統古今集にみえる。  
（但し重保は  
建久二年歿））

建久七年 △十一月 政変。兼実失脚、通親執権。○この年

以後まもなく無名草子成る。隆信は「うきなみ」なる物語を著し

た事がある。

建久八年 ○十二月五日 守覚法親王五十首の記事が明月記に

みえる。隆信も詠進す（翌年か。隆信。  
新古今八八三）。

建久九年 ○一月二十四日 隆信57定家37を訪う（明）。△土

御門天皇即位。後鳥羽院政の開始。

正治元年 ○一月 頼朝53没す。伝隆信筆頼朝肖像。○六月

一日 範玄63為家子、僧正、勅撰集作者。没す。

正治二年 ○二月五日 御室撰歌合（群）。俊成判。隆信四負

四持（書院部本は三月五日とす。）○二月九日 良経家詩歌合、廿五日

同十題歌合、閏二月廿一日同詩歌合に隆信参ず（明）。○七月二

十五日 隆信、定家を訪い、院百首につき語る。「権京兆来臨、為

示合百首事也」（明）。後鳥羽院歌壇こののち活発化す。○八月

二十五日 院百首を詠進す。第二度の百首には隆実実信も詠進す。

○九月 仙洞十人歌合（群）、同廿日院当座歌合桂宮本  
兼書に加わる。

「散位」とあり。秋の頃、右京権大夫を辞すか。なお後者には隆

範廿五才  
前後か及び隆実24加わる。また三百六十番歌合、統古今  
群に隆信

作者となる。十一月八日通親家影供にも参じた如くである（隆信  
日記）。

建仁元年 ○隆信60三月十六日通親家影供歌合（中世  
歌合）。同廿九日

新宮撰歌合（群）。四月廿日鳥羽殿影供歌合（中世  
歌合）。六月以後の千

五百番歌合の作者。○七月 和歌所寄人内定、やがて隆信・長

明・秀能追加される（家長  
日記）。八月三日影供歌合（群）。十五日撰歌合

（群）に隆信加わる。○九月 源頭兼任斎宮寮頭、下向に当つ

て隆信と歌を贈答す（隆信）。○十二月二十八日 石清水社歌合

（中世  
歌合）、隆信作者。○この頃 三河内侍まだ生存か（家長  
日記）。

建仁二年 ○正月十三日 和歌所年始会。隆信不参、但し歌は

詠進、二月十日院歌合に参ず（明）。○三月二十三日 八条院、

美福門院月忌仏事を修す。定家赴くと隆信のみ近侍す（明）。

○五月二十六日 院影供歌合(群)。隆信作者。○九月十五日

隆信出家(法名 戒心)。隆信、法然に帰依し、念仏の一行を勤める。出

出家前、院・通親に暇乞を為し、隆範の事など願う。出家後、兼

美・丹後・俊成らと贈答歌(隆信)。△十月 通親急死。

建仁三年 ○隆信62二月廿三日歌合(明)、六月十六日和歌所

影供歌合(中世)、八月一日詩歌合(明)に加わる。

元久元年 ○十一月三十日 俊成91没す。隆信(續大夫人)63定家43

を弔問す(明)。

元久二年 ○二月二十七日 隆信64没す。念仏しつつ往生「臨終

之殊勝跡」(明・法然上行狀圖)。○三月 新古今集成。為忠一

寂超二、寂然十四、隆信三、三河内侍一首入集す。○時代不同

歌合(群)の作者に寂然・隆信。書院部本奥に「書写(後鳥羽院勅)

云々」とある。なお新時代不同歌合(基家撰)には寂超入る。

〔注〕

(1) 為盛の享年を知る手がかりは殆どない。むしろ次子為業、第

三子為経の方が事蹟も豊富で、享年もおぼろげながら推測しう

る。即ち為業は大治四年頃から官人として出仕し始め、長承頃

には百首を詠む年齢(二十才)であり、治承四年頃には生存している。

為経は天承元年に藏人となり、長承頃には百首を詠じ、久寿・保

元の頃には「老いの身の霜をいただける」年齢であり(後集序、谷山

三才の初老の年齢と推定される如くであろう)。

「千載集と諸私撰集」人文研究昭和廿六年十一月、治承四年には生存してい

る。為業と為経との年齢差は僅少であろう。そしてこれに為

忠の事蹟をからみ合せると、大体、天永——永久頃の生れとなる

のである。それによって為盛の生れをも推測した。また父為忠

は寛治末——永長頃の生れと思われる(拙稿「丹後守為忠をめぐ」

なお為経は管見に入った資料では盛忠又は為経とのみみえ、尊

卑分脈の為隆なる名は見当らない。

(2) 兼盛は仁和寺諸院家記による文治五年没七十一才。頼業は長

承頃の百首には未だ名が見えず、三兄と年齢がやや離れていた

如くなので元永・保安頃の生れと推測しておく。

(3) この為業と、後に伊豆・伊賀守を歴任する受領為業とは或は

別人ではないか、という疑問も生れるが、和田英松(栄花物語

岩橋小弥太氏(「常磐の三夜」国学院)は同一人とされる。思うに、

尊卑分脈に為業なる人物が同時代に見出せぬ事、為忠男為業は

才人であった事、後に中宮大進等の内官を長く勤めた事などに

よって同一人物と認めてよからうと思う。

(4) 石田吉貞氏「藤原定家の研究」参照。覚弁の姉妹とは後の後

白河院京極局。但し尊卑分脈(為忠)には頭広妻なる女子はみえ

ず、定長母(光房)となった女子のみ見える。或は同一人か。しか

し定長は久安五年の生れで、久安五年は長承の後、約十五年で

ある。同一人としては少し年が離れすぎる感もするので別人と

考える方が穏当であろう。別人なら為忠は二人の女子を持って

いた訳である。

(5) 拙稿「丹後守為忠をめぐって」前。なお筑前権守盛忠は「五

葉集」を撰んだという。この頃、為経が撰ぶか(和歌色葉)。序

は敦光。(その断片が万葉集時代難事にみえる。但し和歌現在書目録・八雲

- (6) 十年を隔てた久安元以後、記録に類出する少内記為盛は、六位の官人で、為忠男とは別人。山家集に寂然の兄の「入道想空は(相)かなくなりけるを……」などとみえる想空を、為盛の号とみる説「尾山篇二郎氏「西行法師全集」・岩橋小弥太氏」・「常磐の三夜」いづれも疑いを残されている」と、為業の別号と見る説「川田順氏の註、伊藤（兼光氏）の「山家集」等」とある。この想空は久寿頃には生存していたらしく(時參照)山家集にみえる西行との贈答歌から考えると後葉集に一首位は入集して然るべきであるのに後葉集は勿論、当時の諸撰集にも全く想空の名はみえない。その点、為業は想空が妥当のように思われる。しかし西行の諸歌集には、為業は「為業」とばかりあって「寂念」とさえ記されていない。これは為業が二弟とは違つて在俗生活が長く、出家後も所謂沙弥として一般には「為業入道」と称せられていた故であろう。従つて山家集の想空はやはり為盛ではないか、という推測も当然成立する。(なお西公談抄には「寂然の舎兄を被入道相宜」。後考をまつ。イ空」とあり、ますます問題が生じてくる。)
- (7) 前掲拙稿「丹後守為忠をめぐって」。
- (8) 平安遺文二四鳥羽院庁下文案の別当及び判官代の中に「皇后宮少進藤原朝臣」及び「長門守藤原朝臣」とみえ、いづれかが、為経であろうが、少進の方を為経とすべきか(為経少進、次年参照)。
- (9) 資料的にみて頭広と西行とが関係をもつたのはこれが初めてか。なお三寂と西行との交わりが記録にみえるのは更に後年であるが、恐らくこの前から交わりはあったと思われる。その交わりの契機は現在の処、諸家の推測の如く、徳大寺家の関係によると見る以外はあるまい。即ち三寂の母が待賢門院女房で、

長兄為盛は門院藏人であり、西行は門院の生家閑院(徳大寺)の隨身であつた(なお尾山氏「西行」法師評伝参照)。

- (10) 閑戸家本唯心房集巻首に「俗名頼業丹後守為忠朝臣太子近衛院東宮藏人左近將監三郎踐祚以後叙爵、巡年任志岐即辭退、不経幾年出家居大原」と定家が記している。「日本名筆全集」第三期巻十に巻首の写真版があり、植村和堂氏が解説されている。「書道全集」「定本書道全集」にも掲出されている。また佐佐木信綱氏の「国文学の文献学的研究」にも紹介されている。大村由己は梅庵古筆伝で同様の文を引いている。頼業は康治二年に菅岐守となり「即辭退」とあるのですぐ辭したのであるが、次の菅岐守として明らかなのは本朝世紀久安五年三月に見える藤原公俊である。なおこの時、頼業は藏人とあるが、職事補任にはみえない。院藏人か何かであつたのか。また頼業は久安以後の記録にはみえない(頼りに名をみせる頼業。は日野又は清原家の人)。
- (11) 以下頭広女の生年・考証などは石田吉貞氏「藤原定家の研究」を参照した。
- (12) 金葉集の作者である為忠が詞花集に入集しなかつたのは、頭輔に高く評価されなかつた為であるという外はない。為忠の諸子達は、これまで歌人としての実績？ が殆どない。為忠一族内で百首を詠んだりしているだけで、歌壇的なひろがりを持つた催しには加わつて居ず、詞花集に入らなかつたのも当然である。
- (13) 以下記録にみえる権大進為業が為業と同一人物であつた事は、岩橋氏が前掲論文で指摘されている。この中官は皇子である

(伊通女・忠通妻女)  
(久安六年六月立后)

(14) 隆信集は、詞書の書き方などからして一応その自撰集と認められる。集中に「中納言資実」なる記載があるが、元久元年 俊成

の死については記されておらず、流布本による限り、元久元年中頃、出家閑居の境遇で編まれたものではなからうか。(附記Ⅱ)

(15) 「新院歌あつめ」は、天養元年興善院次郎とも、久安百首氏「西行」

尾山 ともいわれるが、川田順氏伝と歌や谷山氏千載集とは異見

を持たれている。谷山氏は院が詞花集改撰の料に歌を集めた時の事であろうとされているが、私もこの御指摘の如くであろう

と思う。久安百首に、指名されぬ寂超らが歌を進められる資格は全くないし、また百首とは別に寂超が一族の詠草を院に奉つ

ていたとしたら、それをも頭輔が入集を拒否したというのは解せぬから、天養下命の時の事とも思われない。——仁平に詞花

集が撰ばれ、院を始め多くの不満がこの集に向けられ、院は頭輔に改撰を命じた。それを仄聞して寂超は、昔、院の藏人であ

った事をたよりに一家の詠草を奉ったと見るべきであろう。しかし頭輔が没して改撰は成らなかつた。後葉集序に「……改め

られるべき詔ありと、はなすすきはのかに聞えわたりしかども、かりがねのつらねあつめたりしも夕の空にまじり……」

とあるのは、この間の事情を説明しているのである。寂超が後葉集を撰んだのは、改撰成らず常磐一家の詠の埋もれるのを嘆

く意味もあつたのであろう。なお西行と贈答した想空が為盛であれば、為盛は久寿頃は生存していた事になる。想空が大原で

没した時、寂然と西行との贈答歌がある(山家・異本山家。寂然集参照)。

(16) 谷山茂氏「千載集と諸私撰集」参照。

(17) 為業は、待賢門院に抵候、少内記等の内官、二、三の受領を経て皇子后・皇嘉門院に仕えた。特に関白家忠通 基実に近仕し、所謂諸大夫層に属する一人であつた(兵・保元元年 八月廿九日)。尚これで三兄弟出家し、一般に大原三寂と称されたのであるが、実は岩橋氏の説かれる如く常磐三寂と称する方が妥当であらう。

(18) 森本元子氏「歌人源頼政とその家集」(研究8)。

(19) 久曾神昇氏「顯昭・寂蓮」、谷山茂氏「千載集と諸私撰集(二)」(人文研究・昭和 廿六年十二月)を参照。

(20) 三河内侍の妹か(森分脈 にもみえず)。三河といい丹後といい、女房名が祖父為忠の任国に因んでいる如くみえるのは偶然であらうか。

(21) 西住は仁安頃まで生きていた、ともいわれるので(「西行の」、佐と歌)、この辺に掲げておく。なお、川田氏は寂然を最も誠実な人物と評され、岩橋氏は明義進行録を引いて寂然の精進堅固を説かれている。窪田章一郎氏は、西行・寂然らグループの連歌について詳しい考察を行われている(「西行の連歌」窪田章一郎先生喜寿記念 論集・日本文学論叢)。

(22) 山口康助氏「今鏡作者攷」(國語と国文学、昭和廿七年六月)、板橋倫行氏「今鏡」(日本古書 典全書)、太田晶二郎氏「桑華書志所載古蹟歌書目録」(院紀要三十二)。

岩橋氏は今鏡為業作者説も捨てがたいとされる。岡一男氏は今鏡治承成立説をとられる(六条院宣旨私考「文学・語学」第四号)。

(23) 大谷文子氏は、三河内侍の仕えた女御は後白河院女御琮子と

推定されている(「三条院三河内侍」)。  
(孝昭和廿九年一月)

(24) 承安二年二月十二日成立(「日本歌学」)。(大系解題)。歌仙落書によると、三寂中、寂然が最も高く評価されていたらしい。

(25) 定長の出家は、承安元年以後(「石田氏」藤原、又は承安二年頃(「久曾神氏」頭)とされている。尚、為業が寂運出家の頃に歌を贈答した事が寂蓮集(「雑纂本」)にみえる由(「久曾神氏」前掲書)。

(26) 隆信は嘉応二年十月には従五位上であったが、承安四年八月には四位となっていたらしい。なお玉葉承安三年九月九日の条には単に隆信とあり、未だ五位の如くである。

(27) 森本元子氏「歌人源頼政とその家集」(「前掲」)。

(28) 谷山茂氏「梢の少将公重の風情集」(「人文研究昭和」)による。

(29) 西下経一氏「古今集の伝本の研究」参照。なお寂然も元性の許に参じた事がある(「仁安三」)。(年参照)

(30) 一品経和歌懐紙は内蔵頭季能の在任中(「治承三年十二月」に成ったといわれるが、山槐記「治承四年十二月」に「(任)「河内守隆親」元播磨」(一作者)のとみえ、この懐紙は治承四年十二月一寿永二年四月までの成立となる。従って寂念は治承四年十二月以後も生存していたのであろう。尚、「書道全集」(一八)の解説に、教長の冥福を祈るもので、治承五年頃成るとあるのは正しきか。

(31) 隆信妻の没したのは、信実の生れた治承元年以後、民部卿成範の没した前年文治二年(成範は三年三月に没しているから)迄の間である。そして長子隆範六才の年と思われるので、治承末一養和元年の某年秋

であろう。

(32) この歌数は、清水浜臣の校本月詠和歌集附・谷山氏「千載集と諸私撰集(三)」(人文研究昭和二十七年一月を参照した。隆信の歌は「賀茂経隆」六月・統を含まず。浜臣の附考には十二首とある。また統類従本類従本

の寂然の歌(「初ちはつる」)は校本に寂超とし、千載集にも寂超とみえるので(「)として掲げた。因みに、浜臣は、「寂然家集」は後人の編であろう、と言っているが、類従本に關してはその様にいえると思う(「書道全集一八参照」)。

(33) 安井久善氏「玄玉和歌集攷」(「中世私撰和歌集攷」所収)。

(34) 神護寺略記(大日本史)によると、後白河院・重盛・頼朝・光能・業房の影が所蔵され、みな隆信筆であるという。院・業房の影は現存せず。但し美術史家は、残る三点の肖像画は必ずしも同一人の筆ではないと見ている。

(35) 峰村文人氏が「三百六十番歌合」(「小樽臨大」人)で、成立に關して詳細に考察されている。

(36) 法然上人行新画図(第二)。但し建仁元年出家とあるのは誤りか。後記。本稿を草するに當って、石田吉貞・谷山茂・萩谷朴・橋本不美男・樋口芳麻呂氏の御教示にあずかり、また森直太郎氏「歌人藤原隆信」(「日本文学」藤平春男氏「鎌倉室町時代現存歌合年表稿」(「早大工高」研)を参照する事多く、全く不案内の美術史關係については長島健氏の御示唆を受けた。記して謝意を表する。信実については久保田淳氏の御論に譲った。見落した文献

類も多いと思われるので、厳しい御叱正を仰ぐ次第である。

(一九五九・一〇)

附記Ⅰ。寂然の歌三十三首を収める異本寂然集が現在穂久邇文庫に蔵せられ(室町初期の写、定家自筆本の臨写本)、また定家自筆本寂然集も現存する由を樋口芳麻呂氏からお教えいただいた(「書道全集」一九参照)。

附記Ⅱ。書院部本隆信朝臣集について。校正に際しやゝ余白を得たので調査は行届いていないが簡単に紹介させていたゞく。江戸写一冊。春二十、夏十、秋二十、冬十、賀三、恋十五、雑十五、哀傷七首を収める。但し哀傷は二首のみで末尾は欠(第三首目の詞書の途中まで)。以上のほか贈答などによる他人の詠(春三、秋三、賀三、恋七、雑二、哀傷一首)があり、現存本は隆信の作九五首、他人の詠十九首である。奥書なし。巻頭歌は類従本第三首の「きのふまで……」。類従本所収の歌は殆どあるが、所収部立の異なるものが少数ある。また類従本にみえない歌も僅かならある。

上西門院のみまさか、ささきと申ところにて西行坊につたへてよはれしかはまかりて山家の恋といふ事を人々よみしに  
とこのうへをふきすきていぬる山をろしよ

われめさめぬといもにつけこせ

この本が類従本の原本であるか略本であるか軽々には断定しえないが、兼実を右大臣、頼輔を三位と記し、文治二年夏以後の事はみえないので、寿永乃至文治初年頃に成つたらしく思われる。その限りでは一応原本と考えられ、類従本は晩年の増補本

かもしれない。一部分は森本元子氏が「小侍従集・二条院讀岐集」で紹介されている。

## 和歌文学会報告

第五回大会は昨秋十月十七・八両日大阪の関西大学で催された。十七日は歌枕めぐり・公開講演会、十八日は研究発表大会・共同討論会が行われ、共に盛会であった。早大文学会関係では、地元から飯田正一、東京から岡一男・窪田章一郎・藤平春男・井上宗雄・松野陽一が参加した。

和歌文学会は毎月一回研究例会を行っているが、十一月二十八日には東洋大学、一月二十三日には本学で開催された。以上、本学関係の研究発表者は次の如くである。

新勅撰集の歌風をめぐって 藤平春男(大会)

常光院葬孝について——室町中期における

二条派の道統 井上宗雄(十一月例会)

大山守命の反乱物語の歌謡について 山路平四郎(二月例会)  
なお本会の事業として「和歌文学大辞典」の編纂が企画され、本年の夏・秋頃には刊行の予定である。現在事務局は渋谷区若木町国学院大学高崎研究室内。会費年額五百円・入会金無し。  
機関誌「和歌文学研究」(年三回刊行)。